



人との関係づくりがデザインの始まり

昨年、ある動画コンテストに出品させていただき、先日グランプリの内定の連絡をいただいた。まだ公表前なので動画をお見せすることはできないが、これもひとえに制作にご協力をいただいた方々のおかげと感謝している。ここではその制作話をさせていただければと思う。

コンテストの内容は「地元農業をPRする動画の制作」だった。農業の持つイメージ改善、農産物の良い点の訴求、農業従事者の増加を目的としている。内容を読んで正直なところ農業をPRしたいというよりも、瞬時に地元で農業を営む現場の声、作業風景、音を使い、人の見える動画を作りたいという衝動に駆られた。

制作にあたって3つのことをコンセプトとした。まず1つ目に農業に触れたこともない一般人の私が農業を見て何を思い、感じたかを客観的に表現すること。2つ目は農家さん自身の声、作業風景など、できるだけありのままを描くこと。3つ目はPRが目的なので30～60代の老若男女をターゲットとし、シンプルで誰が見てもわかりやすく、且つ農業のイメージを上げるため、雰囲気のある動画に仕上げることだ。

しかし、自分は農業ではないし、農家の友人も知り合いもおらず最初のハードルは高く思えた。どうしたものかと考えた挙げ句、地域のクライアントに聞いて回った。ただし農家さんなら誰でも良かったわけではない。その土地の特産物の農家さんで、経験や形態などを指定した。そんな面倒くさい依頼をクライアントの皆様は嫌がること無く労力を割いていただいたのだが、残念なことに会うまでも至らなかった。また、苦手だが直接農家さんに電話もしてみた。案の定断られたり、なんとなく面倒くさそうに対応された。まあ、見ず知らずの者が突然「PRのため撮影させてくれ」というのも無理があると理解は出来る。

あきらめ半分、意地半分。すると、あるクライアントが一軒の農家さんを紹介してくれた。この農家さんにはこちらの誠意と作りたいという気持ちが伝わり動画制作に興味を持ってくれたため、取材撮影を快諾してくれた。この巡り合わなければ、動画を完成することはなかったと思う。なぜなら前記の通り私は複数の農家さんの取材撮影を計画していた

ので、そこからまた紹介してもらうことができ、他の農家さんも非常に協力的で取材撮影を無事クリアした。

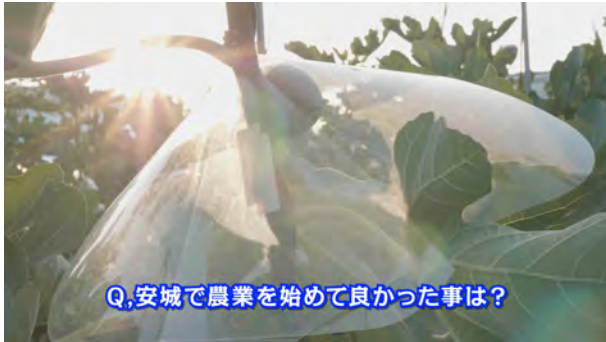
構成上どうしても保育園の取材撮影が必要だった。しかしこればかりは全く伝手が無い。そこで入会している商工会に相談すると、紹介され案外すぐに実現した。今思うと紹介とはいえ園児の個人情報や肖像権が絡むので、よくぞ信頼して承諾してくれたと感謝している。



現場の作業の音で臨場感を出した「ザクッ、ザクッ、ザクッ」



保育園の画を撮れたことは商工会の力が大きい



単焦点レンズで光や色を意識して撮影した

農家さんの取材撮影では、実は農業のPRよりも厳しい現実や規則、縛りなど、多くの問題を聞かされた。具体的な話は避けるが、行政や国まで関わるような大きな問題が透けて見えた。農家さんはそういうどうすることもできない話を誰かに聞いてほしかったとも思えた。その時私は初めて自分の動画が少しでも役に立てればと感じた。

映像は一眼レフで単焦点レンズを使用し、イメージや臨場感が伝わるような画や画角や、作物や農作業をきれいに撮りたい

と光や色を意識した。特に苦労した点はインタビューだ。簡単にインタビューと言っても、人から話を聞き出すのは相当難しい。私だけでなくその動画を見る人全てに理解してもらわなければならない。そのためどう聞けば言葉を引き出す事ができるか、いつも悩む。私はまず世間話で気持ちを和らいでもらい、話しやすい雰囲気作りを行った。また今回は基本屋外なので農作業に関係ない生活音の編集も苦労した。使っている機材の関係もあり、今後の改善すべき課題となった。逆に自己評価できる場所は、撮影や編集技術は別として、テンポ良く全体がうまくまとまったことと短い時間の中でそれぞれの農家さんの特徴を表現できたことだと思う。

動画制作には、情熱であったり、ご縁であったり、人とのつながりの大切さを感じずにはいられない。なぜなら動画は人の心に訴えるものだからだ。それはデザインでも同じで、誰かのためにつくる、行う、表現することは人の心に届けることなのだから、相手を理解する必要があるし、そこからデザインを作り上げていく。デザイナーは決してオペレーターではない。だからこそ人との関係づくりがデザインの始まりなのだと思えて気が付かされた。



個々の農家さんの特徴を表現できた動画となった

コンテストは良い結果だった。しかし本当の目的はその向こうにある。ぜひとも本当の意味で良い結果になることを期待したい。そこに本当の価値があるのだから。